

日本記者クラブ会報

記者研修会

高裁で「裁判員裁判」を体験

東京高裁の806号法廷に全国からの記者研修参加者・61人が集まった(8・24)。廷内正面中央の河本雅也裁判長(東京地裁裁判官)が開廷を宣言。外は「亜熱帯」の午後1時。満席の傍聴席は人体熱で冷房も最初からヘタヘタ状態だった。

裁判長の両隣には裁判官が着席している。高橋康明(東京地裁裁判官)と三村三緒(最高裁判事局付)。両裁判官の隣に参加者から選ばれた裁判員が3人ずつ座った。裁判長席の前方に書記官(吉田智宏・最高裁判事局付)、向き合う形で証言台、その左方に検察官席、対面して被告人席、背後に弁護人席、そして法廷正面に向かって傍聴席。公判に付された事件はこうだ。高

屋台で飲んで支払ったところを逮捕された。

検察は強盗致傷罪(6年以上の懲役)を主張、弁護側はすでに示談が成立の傷害罪は争わず、恐喝罪(10年以下の懲役)を主張するというもの。被告のほか証人2人(被害者・内縁の妻)、検察官2人、弁護人2人も研修参加者が扮した。

3時過ぎに公判終了、プレスセンターへ会場を移し、6人の裁判員と裁判長、裁判官(2人)で評議を行い、量刑が決定したのが5時半過ぎ。そのあと全員で評議の内容や進め方、あるいは裁判員制度の下での法廷取材や報道などについて意見を交換して、第1日目が終わった。続く2日目の模様は3、4ページに。

星へ行ったジャーナリスト

中日新聞欧州駐在客員の熊田亨さん(82)が、8月12日、脳内出血のためパリ近郊の病院で亡くなられた。一時帰国した6月下旬、いつものように一恵夫人と共に10階のアラスカで、お客をされていたと聞いて

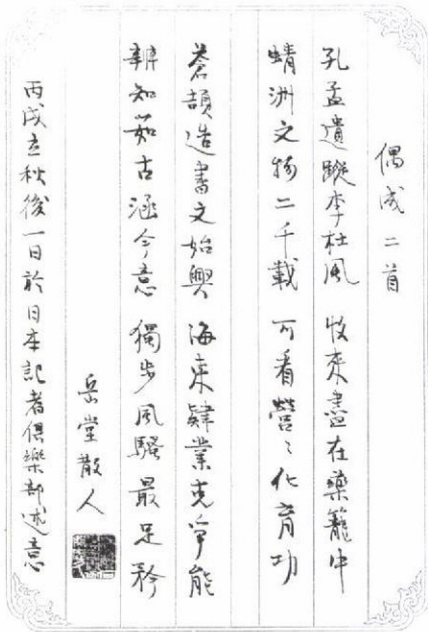
いたので驚いた。

熊田さんは中日のカイロ特派員(55→57)、パリ特派員(67→70)などを経てパリへ移住、フリーに。藤村信のペンネームで「世界」にパリ通信を連載するなどして活躍した。ベルリンの壁崩壊、欧州激動のなかで、ヤルタ体制の終幕とその後について精力的に論評し、著作を発表。

91年からは中日の欧州駐在客員に。翌年から大型コラム「ヨーロッパ展望台」を執筆、これまでに420回を超える。「ユマニスムと豊かな教養と冷静な洞察」にもとづく仕事の評価されて、2000年度の日本記者クラブ賞を受賞した。

外報部の後輩・吉村信亮会員に思い出をよせていただいた(17ページ)。個人的にはその著書「ゴッホ星への旅」を携え、アルルなど南仏を旅したことを思い出す。この本の冒頭、熊田さんは画家が弟・テオに宛てた書簡を掲げている。いつも星をみつめると夢見心地になると書き出し、ゴッホは次のようなことをそこでいつている。われわれは星へ行くために死をえらぶのかもしれない。汽車や乗合馬車が地上の交通機関なら、病氣や老衰は天上へ行く交通機関のように思われてくる——と。

(専務理事 岩崎玄道)



ゲストの石川忠久氏(8・9)から出席者に贈られた七言絶句——解説は10ページに

校中退で失業中の20歳の男(内縁の妻・ホステス23歳と同居)が、深夜の街で他人に暴力をふるい(3週間のけが・示談済み)、そのうえ一万円をとり、その金で



公判（東京高裁806号法廷）

第9回記者研修会

模擬裁判で被告、証人（被害者・内縁の妻）、検察官、弁護人役を務めた7人の記者はあらかじめ台本を予習して“熟演”した。裁判員役6人とプロ3人の裁判官の評議も聞きごたえがあった。体験者の感想は以下の通り。

<被告人>

●裁判員裁判になると、被告人は、より自分の気持ちや訴えを伝えやすくなるのではないかと感じた。なぜなら、プロの裁判官にはやはり威圧感やとっつきにくさがあったが、裁判員の質問は身近な言葉だったし、答えに対してうなずいたり首をかしげたりという素直な反応があったからだ。これまでは傍聴席から見ただけだったので、実際の法廷で本物の裁判官を前にしての模擬裁判は大変貴重な経験だったし、違う角度から裁判を見ることができたと思う。

高知新聞社会部 村上和陽

<検察官>

●あらためて法廷で使われる用語や表現は分かりにくいと感じた。また冒陳や論告を読んでみると、つい早口になってしまい、日ごろの法廷取材で検察官に対して不満に思うことを、自分もしてしまったと恥ずかしく思った。裁判員裁判には、法律知識のない一般市民が参加する。法廷内のやり取りをより分かりやすくする必要があり、その上で記事の書き方も工夫しなければならないと感じた。

神戸新聞社会部 三島大一郎

<弁護人>

●裁判員の判断から、検察、弁護側の主張による心証形成の大きさを感じた。それゆえ、弁護側は話し方などで強い印象を与える重要性を実感した。報道側はその意をくんだ取材が必要であり、今回のような逮捕容疑とは異なる判決が出る可能性を考えれば、逮捕段階から判決を見通す取材が求められ、結果として、報道のみならず、事実を明らかにしようとする姿勢を、裁判員となる市民にも伝えていくことが大切だと感じた。

山形新聞報道部 進藤和美

8月24日（木）

- ◇13：00～15：30 模擬裁判・公判（東京高裁806号法廷）
- ◇15：45～17：45 模擬裁判・評議（10階ホール）
- ◇17：45～18：30 模擬裁判・意見交換
- ◇18：30～20：00 交流会

8月25日（金）

- ◇10：30～12：00 研究会「三位一体改革と報道」浅野史郎・前宮城県知事
- ◇12：15～14：00 昼食会 但木敬一検事総長
- ◇14：10～15：30 研究会「人間のまなざしをもったニュース報道」玉木明氏
- ◇15：35～17：00 研究会「体験的ジャーナリスト論」鳥越俊太郎氏

<参加>46社61人（新聞・通信28社42人 放送18社 19人）

<裁判員>

●人を裁くという行為の難しさを実感した。裁判員として判断を迫られた今回、すべての意見で百パーセントの確信があったわけではない。検察側と弁護側の主張が食い違う点では、どちらが正しいのか、かなり悩んだのが実情。裁判員の負担を軽減するという意味でも、取り調べの可視化を実現してほしいと思った。

なお、裁判員の席は視界が良い。舟をこいでいる傍聴人はすぐに分かるので、取材時にご注意を。

河北新報報道部 末永智弘

●被告、被害者の主張の違いを裁判で聞き逃し、「評議」の段階でプロの裁判官の方から説明を受けてようやく被告に対する心証が形成できた。素人の裁判員は、一度聞いただけでは、理解に至らない。実施された際には、証拠の提示、質問で、よくわかる新しい手法を考え出す必要があると感じた。

量刑を決める際、厳しい量刑を求める傾向が自分にあると感じた。自分の「傾向」をどう意識して、「正当」といえる判決・量刑を決めることができるか、素人裁判官の課題であると思った。

毎日放送東京支社報道部長 田原達雄

●貴重な体験だった。裁判員制度を勉強し、報道してきた立場でありながら、いざ裁判員になると、とまどったのが正直な感想だ。実は、この日、地元で大きな事件がはじけ（前呉市長が地方公務員法違反容疑で逮捕）、地元記者からメールがきたり、会見の電話連絡がかかってきたりと、事件を気にしながらの参加だった。そういう中、冷静に事実認定をしていく作業は実に大変だった。

大変な一方、裁判官以外の裁判員の指摘に納得する部分も多く、あらためて裁判員制度の意義も感じることができた。

テレビ新広島報道部 武ゆかり

模 擬 裁 判

百聞は一見に如かず

「百聞は一見に如かず」を痛感した模擬裁判だった。検察側は「強盗致傷」で起訴し、弁護側は「傷害と恐喝」と反論。判決は何と「強盗と傷害」。両者の言い分とも採用しない通常の裁判では珍しい結果になった。評議も含めすべてを公開しての模擬裁判に参加し、三つのことを感じた。第一は証人調べや被告人質問など、立証過程を理解することの難しさ。メモを取るのに精いっぱい頭が働かない。後で録音などで分かりやすく確認できないと、判断しにくいかもしれない。

第二は検察側と弁護側の言い分が対立した時の判断の難しさ。特に捜査段階と公判で被告の供述が変わっ

▼まだまだ工夫が必要 「裁判取材の経験もあるのだが、いざ、自分が人を裁くとなると緊張やプレッシャーがあつてむずかしいものだ」と実感した。「事実認定のためには具体的に暴行がどのように行われたかなどの把握が必要なのだが、それについての検察と弁護人の説明の違いなども、ちゃんと聞いていたつもりなのだが聞きもろしていた」などなど。研修参加者を前に公開で行われた「評議・量刑決定」がすん

た場合、どちらを信用したらいのか。取り調べ中の録音があるなら、きつと見たいと思うだろう。

第三は評議の結果に絶対はないというところ。裁判員役ではない参加者を対象に拳手で調べたところ、印象ではおおむね四割が判決とは異なる結論にたどり着いていた。本番でも判決のぶれは避けられない。

迅速化が裁判員制度の成否を握ると言われているが、運用を誤ると拙速批判で国民の信頼を失いかねない。制度の導入前と後でどう報道したらいいのか。夏に重い宿題を出された気分でもある。

企画委員

菅沼堅吾

(東京新聞論説委員)

だ後の、研修生代表の6人の裁判員の感想は一言でいえば「いや、大変だった」に集約された。検察、弁護、証人などの話を聞きながら、理性的に事件を再構成することの困難さが告白された。それもあつてついつい心情的な発言に流れがちだったとの反省も。裁判員制度は2009年5月までにスタートする。それまでには一般の人が対応できるように一工夫も二工夫もが必要なようだ。

(山崎)

三位一体改革と報道

「誘惑されて、棄てられて」。宮城県の浅野史郎前知事は、期待していた「三位一体改革」に裏切られた気持ちを、こう表現した。

三位一体改革の本質について「住民が自治体に直接ものを言うシステムをつくる改革」と強調。日本に本物の民主主義を根付かせるために必要だと説明した。

改革にまつわる五つの誤解があるという。一つ目は、国民がこの改革を、国と地方の財源をめぐる綱引き合戦とみている点である。

二つ目は、財務省が三位一体改革を財政再建のために利用しようとした点だ。三つ目は、縦割りの補助金・交付金が廃止されず、負担率が変わっただけで、地方の裁量の広がりにつながっていないことである。さらに、四、

五つ目と続く。

たしかに三位一体改革の論議は、国側の事情が優先

研究会



地方の味方になって

されてきた。報道もそれを前提にしていたかもしれない。その点、浅野さんが「住民、有権者、納税者」の言葉を繰り返し、改革の意味を説いたのは新鮮だった。

住民代表の地方議会のあり方にも言及した。税財源が地方に移った場合について「地方議会は予算編成にも事実上かわらなければならぬ。議員提案で条例もつくるべきだ」と叱咤激励する。

長野県をはじめ、全国の都道府県、市町村には力の差がある。北海道夕張市のように財政破たんする自治体も出てきている。今後、地方が生き残りをかけてどう進めばいいか、知恵の出どころだ。

浅野さんは報道側にも注文した。「情報を偏りなく伝えてほしい。地方の味方になって」と。現職時代、旅費や食糧費の不適正支出、県警捜査報償費などの情報公開に積極的に取り組んだ改革派の訴えだ。

「情報を正しく伝えること」。都市と地方との格差をなくすためにも基本の大切さを再認識した。

信濃毎日新聞論説委員

矢嶋正幸

浅野史郎・前宮城県知事

人間のまなざしをもったニュース報道

玉木 明氏



周りを見れば20、30代の若手記者ばかり。やや場違いな気もしたが、玉木さんの話は、

いささか耳の痛い話を含め興味深かった。

玉木さんは「出来事は正しく客観的に認識できるのか」「言葉はありのままを伝えられるのか」と提起し、「報道に携わる者は、絶えず『あいまいな言葉・言語』を使って表現していることを忘れてはならない」と指摘。具体的な新聞記事を例に挙げ、無署名の客観報道が陥る落とし穴、限界などを示し、「これまで客観報道の中で排除されてきた『一人称』の視点を取り戻すべきだ」と語った。

また、「人間のまなざしのあるニュース報道」が必要として、署名記事による一人称の視点を強調したが、客観報道そのものを否定するのではなく、場合によっては一人称の表現の方が事象を正確に伝えられる

一人称の視点で

し、客観報道の記事を書く場合でも、自分の視点、言葉で一人称の記事を書けるようにしておくべき、ということだと私なりに理解した。これはノンフィクション作家の柳田邦男氏が提言している「五人称の視点、分析」にも通じるものだろう。

私自身、客観報道の大切さをたたきこまれた世代。経験を積む中で、その危うさも感じてきたが、ニュース、言語感覚が体に染みついて抜け切れないし、定型の対応しかできないのも事実。これを機に反省しなければと思う。

熊日では現在、事件・事故などを除き、一般記事も原則署名にしている。これは一人称うんぬんではなく、読者が紙面と記者をより身近に感じられるようにするのが狙い。また今春から、記者がさまざまな現場に出かけ、暮らしの中の出來事を見つめ、自らの思いも入れながら「一人称」で伝える「記者見る聞く」(随時掲載)を社会面で始めた。当初、頭の固い私には違和感もあったが、読者には好評。機会があれば、私も「一人称で」と思っているところだ。

熊本日日新聞社会部次長 中村俊隆

体験的ジャーナリスト論

鳥越俊太郎氏

毎日新聞の記者として支局に勤務していた時代から、テレビ番組のキャスター当時の経験、そして市民参加型のインターネット新聞「オーマインユース日本版」の創刊まで。豊富なキャリアを象徴するようにさまざまなエピソードを語る鳥越氏は「現場」と「直感力」の大切さを繰り返し強調した。

直感力とは、現場の経験を積みむことで得られる、論理を超えた「ひらめき」の感覚だという。キャスター時代に遭遇した和歌山カレー事件でも、「何かおかしい。何か変だ」という直感が働いた。

当初、警察は毒物について「青酸化化合物」と発表していたが、現地から送られてきた映像に違和感を覚えた。青酸化化合物なら微量でもすぐに倒れるが、映像の被害者は歩いてる。



放送後の会議で、だれも警察発表を疑わなかったが、

現場と直感力

疑念は消えずスタッフに調査を指示した。数日後、警察発表は「ヒ素」に変わった。

「多くの現場を経験したからこそ感じ取れることがある。料理人や旋盤工のような職人は、長い経験を積んで身につけた勘が命。ニュースを伝えていくことも同じだ」。鳥越氏は、ジャーナリストではなく「ニュースの職人」を自認している。

人生は単線ではだめ。いろんな現場を経験したことが今に生きている、とも言う。大阪での警察担当時代の話は、なかでも印象的だった。

電柱に隠れてひたすら刑事の帰宅を待つ。何のネタもなく、ただ会えただけで幸せ。そんな時に限って、夜の空を見上げると星がきれいに見える。「おれは何してるんだらう。何をしてもなく、ただ思ってた。でもそれが、自分が何をやってるかを考えることにつながっていく」と振り返った。

ふと、自分の仕事の意味を見失うことがある。そんなとき、この話を思い出してみようと思った。

京都新聞社会報道部記者

阿部秀俊

アレグザンダー・ダウナー オーストラリア外相

▼日本と戦略的パートナーシップ

96年のハワード政権発足と同時に職について以来10年余。ダウナー氏は、主要国では最古参の外相だ。

ハワード政権は、対米同盟関係を従来以上に重視し、米欧間にあつれきが生じたイラク戦争でも、一貫して米国を支持した。小泉政権と重なる部分が多い。

ダウナー外相の冒頭スピーチも、まずイラクに言及。ムサンナ州での自衛隊と豪州軍の協力の成功に触れ、「両国間の戦略的関係拡大の表れ」と称賛した。また、「日本が心地よく感じるベースで」と、日本の憲法上の制約に配慮しつつ、「豪州は日本との戦略的パートナーシップを進める用意がある」と述べた。

実際、西太平洋地域で、日豪両国



8・1(火) 記者会見 司会 矢島誠司
委員 通訳 澄田美都子 出席 68人

ほどパートナーとしての条件が整っているペアは他にない。両国とも、近接する諸国とは、政治・経済体制や経済的発展度の違い、あるいは歴史的な経緯などによって、難しい関係がある(豪州にとってのニュージーランドをのぞく)。

しかしながら、筆者の会社を含め、日本のマスコミによる豪州報道は不当に手薄いのが現実だ。シドニー特派員経験者なら誰でも同意見だと思いが、例えば、全く同種の事象が起きたとしても、米国で起きたなら大きく扱われるのに、豪州の話だとボツになる。はつきりいつてどうでもいい欧州の内政の話が取り上げられる一方で、豪州の動きは無視。「知的怠慢」と言っていいたいだろう。

なお、レバノンからの豪州人の退避についての質問が出た。紛争前、同国に居住していた豪州人は約7千人で、多数は二重国籍者とみられる。去年12月にシドニー郊外で起きた人種暴動ではレバノン系が一躍注目を集めたが、今回の紛争で、さらに豪州への移民が増えそうだ。

朝日新聞外報部(元シドニー特派員 坂口 智)

マルチテニス・フランススカルクビック 南アフリカ環境・観光相

8・2(水) 記者会見 司会 中井康朗
委員 通訳 池田薫 出席 48人



▼アフリカ初のW杯への意気込み

ワールドカップ(W杯)ドイツ大会の熱気と興奮の余韻が残る8月2日。次期大会開催国、南アフリカのフランススカルクビック環境・観光相には、早くも2010年の大会に向けた治安や準備面での不安点を指摘する質問が相次いだ。

「100%スケジュール通り。(準備は)着々と進んでいる」。同相にとつて、予想はしていただろうが厳しい会見だったかもしれない。そんな中でも決して感情的にならず、一つずつ丁寧に答える姿に、誠実な人柄と、大会成功への並々ならぬ気合いが見てとれた。

南アには既に1995年のラグビーW杯や、2002年の環境・開発サミット開催の経験がある。同相は

「ラグビーW杯が開かれたときも、アフリカの国で大きな大会ができるのかとの声があったが、ふたを開けると大成功だった」と指摘。「アフリカ大陸として、どこにも負けず、ちゃんと主催国になれることを身をもって示すしかない」と述べ、アフリカ初のサッカーW杯開催への意気込みをにじませた。

多発する凶悪犯罪については、背景にある貧困削減のため雇用確保が必要と指摘。警察予算を増やすなどの対策を取っているとした上で「重大犯罪の率は減る傾向が示されている」と自信を示した。

成功を収めたドイツ大会と比べても「進ちよく状況は順調」と言うが、一方で、貧弱な公共機関や多発する凶悪犯罪におお不安を感じる関係者が多いことも事実だ。宿泊施設の不足も指摘されている。

大会まで4年。この美しい国の「W杯開催能力」に、ファンらが全幅の信頼をもつようになるには、これから2、3年で同国がいかに「実績」を世界に示せるかにかかっている。

共同通信外信部 田中 寛

山崎 拓 自民党前副総裁

8・7(月) 昼食会 司会 安川健児理事
高橋利行委員 出席 123人

▼やはり出馬しませんか

山崎拓氏が注目されたポイントは二つだった。靖国神社問題と自民党総裁選だ。代表質問者の高橋氏によると、山崎氏は、今回は前者の立場だけに限らせてほしいとの要望があったという。

そこで、まずは山崎氏が会長の「国立追悼施設を考える会」の報告書を読んだ。靖国神社には①外国の要人が訪れる無名戦士の墓がない②天皇陛下が30年以上、参拝していない③A級戦犯合祀問題で中国、韓国の強い批判が出ている④祭られる祭神として戦後の国事に関連して亡くなられた人を含められないなどの限界があると指摘した。

そのうえで「靖国を超越した追悼施設が必要」としたが、他方「靖国は靖国としてあり続ける」。ただ、



これらの部分にはニュースがない。

おや、と思ったのは、靖国神社側がA級戦犯の分祀は教義上でできないとしている点に関連するが、山崎氏が指摘した「小野田寛郎さんは名簿に入っていたが、生存者だったので名簿を消している」という事実。真偽を確かめなければならぬ。

これだけで終わったら会見出席者が満足するはずがない。聞きたいのは自民党総裁選のこと。山崎氏の要望は要望として、質問者としても総裁選への出馬意思の有無をたださざるを得なかった。

「この決断は、本当にいたしておりません。立つことに意義があるとは考えにくい。オリンピック精神とは違う。立つ以上は国家的意味がないと立てない。大義名分がないと立てない」

やはり総裁選には立候補しないか。そう感じた十日後に不出馬を表明した。このままでは「一強二弱」の消化試合に終わりそうだが、ゲームを盛り上げるためだけにやるなんてことは山崎氏の主義に反することに違いない。

共同通信論説委員長 井芹 浩文

中島 勇 中東調査会主席研究員
宮家 邦彦 元外務省中東課長

8・7(月) シリーズ「中東ベシク」⑬
司会 脇祐三委員 出席 76人

▼国家对武装組織の戦争

戦闘拡大のレバノン情勢をテーマにした「中東ベシク」は、まさに、タイムリーな企画であった。

イスラエルが、なぜ、過剰としか言えない軍事攻撃を続けているのかという問題について、中島勇さんは、「今回初めて、ヒズボラがイスラエルに越境攻撃したこと」および、「今回初めて、ヒズボラのロケット弾がイスラエル第3の都市ハイファを直撃したこと」を指摘したうえで、「レバノン政府がコントロールできない武装組織が、戦争を仕掛けてくるといふ、新たな戦略的脅威に直面して、イスラエル政府としては、停戦実現よりも、脅威の除去を優先せざるを得ない状況に追い込まれた。イスラエル国民も、軍事作戦の継続を、ほぼ一致して支持している」と分析した。



宮家氏

した。また、宮家邦彦さんは、今回の戦闘は、単にヒズボラ



中島氏

「代理戦争」という側面もあり、中東全域に連鎖・拡大してゆく危険性ははらんだ「重大な危機」であると強調した。そのうえで、アメリカの中東政策の変遷の中で、戦闘や紛争に関する「従来のルール」が、もはや通用しなくなっていることが、停戦の実現を困難にしていると指摘した。

「国家对国家」ではなく、「国家对武装組織の戦争」という新しい現実、紛争の当事者自身がとまどい、国際社会も何ら有効な打開策を見いだせずにいる。

ヒズボラやハマスをはじめ、中東各地で勢力を増大させている「武装したイスラム原理主義組織」を、今後、中東和平と民主化のプロセスにどう参加させ、武装解除をどう実現させてゆくのかを考えさせられる会となった。

NHK解説委員

出川 展恒

谷垣 禎一 財務相

8・8(火) 記者会見 司会 橋本五郎委員
出席 57人

▼「地域の活力再生」で持論を

ポスト小泉レースにいち早く名乗りをあげた。当初は地をほうようだった世論調査の支持率は、立候補表明を機に、2ケタをうかがうところまで上昇してきた。

「これまでは財務相として自分の仕事をきちっとやってきたが、領空侵犯はしないようにしてきた。総裁選への立候補で、

全体として何を考えているのか、皆さんの視野に入ってきたのではないかと手応えを少しづつ感じてきているようだ。

前日まで京都、高知、愛媛を遊説してきたとか。その体験をふまえ、記者会見では「地域の活力の再生」を中心に持論を展開した。

「生涯現役の時代に、定年制の維持が必要なのか」「弱肉強食ではなく、額に汗して働いた人がまあまあ安心して暮らせる社会を作る」

告示1カ月前なのに、早くも演説



省の言いなりでは」と辛口の質問も出た。これには「消費税を上げるのが財務省の願望だからといって、口をぬぐってはいられない。そこをハッキリ言うことが国民の信頼を勝ちうるゆえんだ」と言い切った。

ただ、総裁選は安倍晋三官房長官の独走状態に変わりはない。

「小泉政権の5年間の何を引き継ぎ、何を付け加え、何を改めるか。それは基本的に政策論争だ」地道な政策論争を貫くしかないとの決意表明とみた。

朝日新聞論説委員 恵村順一郎

石川 忠久 漢字文化振興会専務理事

8・9(水) 研究会「漢字文化の現状と今後」
司会 宇治敏彦企画委員長 出席 59人

▼漢字文化の再興を説く伝道師

パソコン、ワープロの普及で日本人の漢字力が落ちてきているという。一方では漢字検定受験者の増加や漢字クイズ本が売れるなど、漢字再評価の機運も見える。「日本人と漢字」を考えるとき、この落差をどう見たらよいのか。

漢詩の泰斗にして元大学教授の石川先生は、さほど意に介していないように見える。「学生の答案に漢字ならぬ「感字」が目につくが」との質問にも、「それでも漢字を書こうとしているわけですから。日本の若者に対する信頼は厚いようだ。その自信は自ら推進役になって設立した漢字文化振興会の活動からくるらしい。かつて国語科目の中に6単位あった漢文の時間が、

ついには実質ゼロになってしまった現実を踏まえ、各地で草の根漢文授業ともいえるべき講演会やシンポジウムを催している。旧藩校の地で開く藩校サミットも5回を数え



たという。漢文教育こそ教養の源、との信念からだ。先生は熱く語る。失語症患者が漢字だけは認識できたという大脳生理学の成果を引き合いに、視覚に訴える漢字の優秀性を説いたと思えば、仮名の発明はもとより、漢文読解に訓読法、返り点を生み出した日本人の能力の高さを力説する。頼山陽を頂点に花開いた独自の漢詩文化についても、「今では日本が中国よりはるかに上」——自負ものぞかせた。久しぶりの「講義」で興が乗ったか、漢字制限や新字体など「戦後漢字政策の愚」から、中国の簡体字、はては中国の政治に至るまで話は縦横に飛んで、あつという間に時間は過ぎていった。

この日のため詠んだ七言絶句二首(10ページ参照)と、自著『漢詩への招待』から王之渙の「涼州詞」を流暢な中国語で披露して会見を締めくくった。中学時代の漢文の授業を思い出した。

日本経済新聞出身 藤田 精一

河野 太郎 衆院議員

▼河野一族の反骨精神



「本日は法務副大臣としてではなく総裁選出馬希望者としてお越し願いました」

との司会者の言葉で、ゲスト本人も含めて会場が爆笑するなかで、和やかな雰囲気で見聞が始められた。

この日も5月11日の出馬表明以来、持論としている7%の消費税を財源とする国民年金制度の導入を強調。これを1階部分として、任意の積立式を2階とする抜本改革の実現で、財源不安や未納問題も生じないし、社会保険庁も不要になると自信満々に語ってみせる。

「現状の年金制度を是とする安倍候補は間違っているから、総裁選で対決したい」と何回か述べつつ「自分が当選すれば安倍氏とは異なり、中道左派の票も国政選挙などで取り込める」と語り、安倍氏を牽制？

8・10(木) 記者会見 司会 川戸恵子委員
出席 81人

会見当日には額賀、山崎両氏の不出馬が確定的となり、ますます安倍氏が圧倒的な勝利を収める可能性が強まっている。それにもかかわらず大本命・安倍氏に対抗しようと欲する毅然とした姿勢と心意気。

ここに絶対権力者の佐藤栄作氏に逆らい新党旗揚げをもくろんだ一郎氏と、同様に田中角栄氏に刃向かい、「新自由クラブ」結成に走った洋平氏と三代にわたって、脈々と受け継がれる「河野一族」の反骨精神をあらためて感じられよう。

だが、祖父、実父は世論の喝采を浴びる反面、戦略的な無謀さが起因して自滅する側面があった。肝心の20人の推薦人に関しては「8月23日以降に明白になる」とかわした。

しかし、結果は残念ながら出馬不可能に至った。今回の孤独な出馬騒動に対して、単にマスコミの注目を得るためのゲーム感覚のみでのスタンド・プレーとの批判を浴びなければよいが……。会見では外交、教育問題にも言及。ここへの活発な質問が出たのも救いであった。

山形新聞客員論説委員(東京駐在)

浅川 博忠

ヘマント・クリシャン・シン
駐日インド大使

▼日米豪との戦略対話に留意

10億の民による「世界最大の民主主義」を標榜し、ITを武器に一躍、次世代の経済大国へ駆け上がろうとする南アジアの巨象インド――。筆者が特派員をしていた一昔前とは隔世の感がある。首脳外交で行き詰まった中国、韓国とは裏腹に、日印関係は政治・経済両面で順調に発展している。

新大使はコロンビア、インドネシアで大使を歴任したベラン外交官で、7月に着任したばかり。

さっそくインドの独立記念日である8月15日、夫妻で富士山に登頂し、山頂の神社に参拝したという。その際、「両国関係が極みに達するよう力と知恵を与えて」と祈願したエピソードを会見冒頭に披露した。



8・22(火) 記者会見 司会 春名幹男委員
通訳 西村好美 出席 56人

「2000年の森首相の歴史的な訪印以降、両国の絆は強まった」と指摘、交流の成果や地域安定に向けた戦略的なパートナーシップを強調した。

次期首相として最有力視される安倍官房長官は著書の中で、対中牽制の意を込めて民主主義など共通の基盤を持つ「日米豪印4カ国の戦略対話」を提案している。これには、インドネシアなどを襲った大津波に4カ国が救援で協力した実績を挙げながら、「安倍氏の本を読んだ。提案に留意し、正式な話があれば検討して政府の立場を表明する」と新たな枠組み作りに含みを持たせた。

インド国内では購買力を持つ中産階級が着実に増えているとはいえ、なお貧富の格差は大きい。宗教対立や隣国パキスタンとの緊張も残る。日本企業の本格進出には投資環境の整備が求められる。

年内にはマンモハン・シン首相の訪日も予定され、日印関係のさらなる発展に新大使が手腕を発揮する余地は大きい。

日本経済新聞執行役員

秋山 光人

但木 敬一 検事総長

8・25(金) 昼食会 司会 石村英二郎理事
普沼堅吾委員 出席 165人

▼「川流不息」―自立型社会と司法改革

「川の流ればやまず(川流不息)」。
昼食会後、謎かけのようなメッセー
ジを色紙に残して降壇した。古代中
国の「千字文」という漢詩の一節だ。
「意味はそれぞれ皆さんお考えくだ
さい」ということだったので、あえ
て私なりの解釈を試みた。

一つは、現在進行中の特捜部事件
が政界に波及する見通しを示したと
いう解釈。だが、これは私のような
現役検察担当の疑心暗鬼かもしれな
い。従ってもう一つ、就任から2カ
月を迎えた但木総長の決意表明とと
らえたい。その含みは、講演の中で
暗示されていたと考える。

但木総長は日本が今、過去にない
変革の渦中にあるとの見解を示し
た。日本は歴史的に「権力と国民の



間に一定の信頼関係があった」ため

「戦後もイラクのような対米テロが
なかった」という。そうした「お上
任せの国」で「自発的革命は起きな
い」が、バブル崩壊で初めて「保護
主義から国民自立型社会へ」の転換
を迫られていると分析する。

とりわけ「司法は、国民にとって
あそこに任せておけばいいという典
型的なお上中のお上」であり、国民
参加型の裁判員制度は「最先端を行
く」改革だと強調する。そして、国
民の関心の低さという懸念も承知で
「日本が戦後、日本的民主主義を成
熟させたことを考えれば、新しい制
度を自分たちの社会に同化できない
わけがない」と確信している。

一方で、日本ほど司法従事者の汚
職が少ない国はないことに触れ、「日
本司法は質的に世界に冠たる」とも
自負した。「川の流れ」とは、いか
なる変革期においても日本司法が変
わらず守り続けていくべきものは
「国民との信頼関係」だとする示唆
であり、それを堅持していくという
マニフェストではないか。

毎日新聞社会部

伊藤 一郎

御手洗富士夫 日本経団連会長

8・28(月) 昼食会 司会 滝鼻卓雄理事長
小孫茂委員 出席 174人

▼日本をイノベートできるか

日本経団連の会長に就任して3カ
月。「希望の国を目指して」と題し、
御手洗富士夫・会長が自らのビジョ
ンの一端を語った。

御手洗会長は一筋縄ではいかない
人物だ。アメリカ駐在で体得したド
ライ合理的主義と昔気質の義理人情
が渾然一体となっている。この日の
昼食会からも、会
長のそんな二面性
がうかがえた。

御手洗会長は、
日本を希望の国と
するために、「経
済、社会から国民
の意識にいたるま
で、イノベーション(変革)を推し
進めることが重要」と訴えた。小泉
構造改革を高く評価し、経済格差の
拡大についても、「能力や努力によ
る格差は経済活力の源」と是認した。

その一方で、「小学生には、お互
いに助け合うことが人間として大切
だ」という伝統的な価値観を教える必
要がある」「他人を尊重し、弱者を



思いやる公徳心が必要」などと、ク
ギを刺すあたりが、会長一流の懐の
深さだろう。

バランス感覚にたけた御手洗会長
は、ずけずけと物を言うタイプだっ
た前任者の奥田碩・前会長とは一見、
対照的だ。

質疑応答で、こんなやり取りがあ
った。

「消費税率は何%にすべきだと考
えるか」

「経団連とし
て1月に発表す
るビジョンに盛
り込みたい。今
は明確な数字を
持っていない」

就任から日が
浅いこともあつ
てか、政治がら
みの問題では、慎重な言い回しも目
立った。

しかし、キャノンの社長時代の経
営姿勢は大胆かつ革新的だった。御
手洗・経団連がポスト小泉の新政権
にどんどんと注文をつける日も、そ
んなに遠くはないはずだ。

読売新聞編集委員

松田 陽三

覇権主義、世界唯一の超大国、自由と民主主義の使命、帝国主義、高慢、単独行動……。

9・11テロとイラク戦争後のアメリカにはありとあらゆる形容詞がついてまわる。不安、あきらめ、追従、反発、あこがれ。世界がアメリカを

見る目はさまざま。

アメリカの底流探る

るが、市民の多様な人生と考える方を細かく伝える報道はまだ少ない気がする。そんな日本のアメリカ報道に活を入れる機会になれば、と願っている。

しかし、「アメリカって何？」と聞かれると私たちは口ごもってしまうのではないだろうか。

10月からスタートする研究会「アメリカの底流」(仮称)は、最も多くニュースに登場するのに、最もわからない国、アメリカの底

流を探るのが目的だ。社会、宗教、人種などを切り口に、アメリカをよく知る専門家に現状を語ってもらう。アメリカ人の価値観、常識、発想法を考え直す場にした。

略称「アメ研」。大統領や国防長官の勇ましい発言は大きく伝わ

企画委員 中井 良則
(毎日新聞論説委員)

企画の秋味

右のように米国の研究会が始まります。多種多様な社会の現実とその政治・社会システムを再吟味する機会になるのではないのでしょうか。毎日の中井さんと共同の春名幹男・特別編集委員が幹事です▼藤村幸義さんが引つ張って来た中国経済の研究会は、通算9回で一応の幕、政治編を検討してもらっています。「中東ベールシク」は昨年1月に読売の中井康朗・論説委員が始めた研究会ですが、イラク、イラン、レバノンと最近では日経の脇祐三・論

説副主幹が大車輪でコーディネートをしてこなしています。二人で当分続けてもらうつもりです。長命の「HIV/エイズ」は、産経の宮田一雄・編集局編集長の独壇場です▼秋から年末にはベトナムのズン首相、インドネシアのユドヨノ大統領、インドのシン首相の訪日も予定されているようです。9月末の新政権の発足、アジアからの要人来日、米国、中国、ロシア、韓国などの大使招待、そして充実した研究会。秋の味覚はよりどりみどりになるかも。(女)

漢詩のプレゼント

石川忠久さん(8・9)は二松学舎の元学長で、漢字文化振興会の専務理事。というよりテレビやラジオでの漢詩の先生といった方が一般には通りがいいかもしれない。

よくぞ皆さん、漢字、漢詩に目を向けてくださったと、出席者に著書『漢詩への招待』だけでなく、フロントページ掲載の漢詩二首をプレゼントしてくれた。以下は岳堂先生の自作の解説です。

孔子の遺蹟李杜の風、
取め来て尽く葉籠の中に在り

孔子、孟子ののこされたもの、李白や杜甫の風、こういったものを全部日本人は取り込んだ。自家葉籠中のものにしていくという意味です。

蜻洲の文物二千年、
看るべし営々たる化育の功

蜻洲というのは日本のことであり、昔からあきつしま、とんぼの洲というのです。日本の文物二千年。この中国から受け取った文化を自分なりに化し育てた、その手柄とい

うのは見るべきである。

蒼頡書を造りて文始めて興る、
海東業を肆いて克く能を争う

蒼頡という人は伝説で漢字をつけた人と言われています。あの蒼頡が文字をつくって文化が始まった。文はじめて興る。海の東であるこの国にも渡ってきて日本人は業をならいよく能力を争った。日本人はまあそういつちゃあれですが、能力がありますのでね。その能力を争って負けないと一生懸命勉強した。

弁知す茹古涵今意、
独歩風騷最も矜るに足る

茹古涵今というのは、唐の文章家・詩人の韓愈が使った言葉であります。が、いにしえを食らいいまを含むという意味で、温故知新と近い意味です。昔のことを食べるように勉強し、いまのことは口に含むようにして、わかまえて知るといふことです。日本では、中国に学んだけれど独立独歩風騷というのは文雅という意味です。みやびのことですね。日本独自の文雅をつくった。非常に誇るにたることだからこれを自覚しようという意味です。

△理事交代▽

毎日新聞社

(新) 朝比奈 豊 常務取締役主筆

(旧) 橋本 達明

読売テレビ放送

(新) 吉野俊太郎 取締役報道局長

(旧) 森岡 啓人

日本新聞協会

(新) 鳥居 元吉 理事・事務局長

(旧) 今田 昭

△監事交代▽

札幌テレビ放送

(新) 舟橋 隆治 常務取締役東京支社長

(旧) 笹原 嘉弘

△法人会員代表変更▽

スポーツニッポン新聞社

(新) 山本 進 代表取締役社長

(旧) 白根 邦男

日本新聞協会

(新) 鳥居 元吉 理事・事務局長

(旧) 今田 昭

北海道テレビ放送

(新) 荻谷 忠男 代表取締役社長

(旧) 浜本 孝久

山口放送

(新) 岩田 幸雄 代表取締役社長

(旧) 赤尾 嘉文

*第428回理事会承認の役員交代と法人会員代表の変更です。

リレーエッセー
OPECとの
出会い①



私が中東産油国

を取材したのは、石油ショックから4年後、今から28年前のことである。NHK特集「ファイサル王の決意——石油戦略発動——」制作のためであった。シヨックの最中には、外信部長という東京の行政職だったので、移動特派員（1958年）以来20年ぶりの中東。とまどうことも多かった。産油国では、アルコールは一切ご法度である。3週間のサウジ滞在、1週間には及ぶイランとリビア取材の後、エール・フランス機が領空を

離れた途端、「ボン」「ボン」とシャンパンをぬいてふるまってくれた粹なはからいを今でも忘れない。

リヤドの中央モスク前の広場で人出を撮影しようとする、宗教警察がこん棒を持ってすごい剣幕でとび出しカメラを制止す

石油とコーラン

磯村 尚徳

る。聞けば、むち打ちや手首の切断の公開処刑が予定されていたとか。いうまでもなく、サウジのファイサル王がアラブに非友好的な国に石油を供給しない決定をした動機は、宗教的ともいえるアラブの大義のためであった。原油先物市場の思惑と

いった今日の状況とは全く次元がちがう。イエルサレムをアラブに取り戻したいというファイサルの悲願を、映像で視聴者に分かっていたため、映像で視聴者に分かっていただけ、われわれは、サウド家の成り立ちなどを映画「アラビアのロレンス」もどきに描写しようと努めた。ファイサル王の伝記を下敷きにして。

その他記憶に残っている点、それは産油国の富に感じた違和感である。当時の世界のスーパー・スターで、ファイサル王の秘蔵っ子といわれたヤマニ石油相は、「われわれは、財宝の海の中にいる」とのたまったし、その一分の隙もない服装、宝石のアクセサリと共に忘れがたい。ホメイニ革命で倒れる半年前のイランのパールレビ国王が住む金殿玉

楼。リビアのカダフィ大佐は、豪華な住まいの撮影を許さず、そのかわりに、公邸の庭にテントを張り、メッカに礼拝して、敬虔なイスラーム教徒ぶりをアピールした演出等々。

今日のリヤド、ドーハの目に見える豊かさに比べ、まだ背のびする姿がそこには見られたし、OPECは、今ではVRAI（ヴェネズエラ、ロシア、アラビア、イラン）というキーワードにとってかわられようとしている。砂漠のロマンとは程遠い世界である。

(1977年度クラブ賞受賞)
原油高とオイルマネーの動向が大きなニュースになっています。「石油ショック」に襲われた1970年代も特派員や経済記者が産油国やOPEC取材に奔走しました。12月号まで当時の「思い出」をつないでいただきます。

悔恨の

ロッキード事件報道

田中角栄元首相が逮捕されて30年が経った。檢察キヤップとして取材を担当したロッキード事件は、時間が経つごとに悔悟がつのる。

でも、それは田中元首相逮捕の取材競争に負けたことではない。むしろ1976年7月27日の田中逮捕を当日に予告した他の新聞はなく、毎日「檢察重大決意へ 高官逮捕は目前 5億円の流れ突きとめる」と異色の朝刊を作っていたが、このことがかえって私の心を苦しませる。

1976年2月4日、アメリカ上院外交委で火を噴いたロッキード事件は日米をまたにかけた巨大な疑獄。東京地検特捜部は暗黒の帝王・児玉誉士夫の逮捕を長い間狙っていたが、その実態はアメリカ議会のほうがよく知っていた。「もし、この捜査に失敗すれば檢察の信頼は崩壊

する」と特捜檢察は必死だった。

その翌日には裏舞台を示唆する毎日新聞の外電があった。「ワシントン五日」昨年夏ワシントンの上院外交委多国籍小委に、ロッキード航空会社の極秘書類が同社会計事務所から誤送された。これはミステリーだ」これが事件の発端で、田中元首相の刎頸の友・小佐野賢治、丸紅、全日空の社長らの名がアメリカの議会で出てきた。日本の大物政治家がゾロゾロ登場しそうな恐ろしさがあった。だが、児玉が脳血栓のため逮捕できなかったが、それでも大物政治家が浮かんではいる。

社会部には「ロッキード取材班」に加わる希望者が殺到した。大阪社会部のKは東大空手部副将の猛者記者。上司の部長に「ロッキード事件に大阪社会部が関係しなくないのですか」と、直談判して東京社会部



司法クラブに長期出張した。

彼は夜回りの走行距離も2倍なら、食事も2倍、コーヒーでさえ「ダブルで！」と注文したものだ。彼は打ち合わせの時、言ったものだ。

「山本さん。特ダネとか、他社を考えたらダメでせ。これだけの事件ですわ。檢察の金庫破りをするくらいは意気込みでなければあきまへん。そう、スパイ大作戦ですわ」この時は知らなかったが、読売大阪社会部OBの大谷昭宏（現・フリージャーナリスト）が月刊雑誌「潮」で打ち明けている。

「Kと私は大阪府警捜査一課の事件記者。すさまじい競争をした。殺人事件の被疑者が勾留期限ギリギリで自供した。私は社会面トップの特ダネと思ったが、毎日にも出ている。そんなアホな」と調べたら、Kが取調室の外の鉄格子にぶら下が

り、赤い顔をして刑事が調書を読む声を聞き取った」

Kはのちに編集局長になったが、当時の司法クラブは事件記者だらけだった。100人はいる社会部のほとんどがロッキード事件に関与したが、檢察担当はKを含む7人の侍。

真夏の司法記者クラブには眠りこける猛者たち。男臭い汗。これは、私に死体置き場を連想させたが、夜、目を光らす姿には鬼気が迫った。

そして「君モシクハ君ノ仲間ガ殺サレヨウト、当局ハ関知シナイ」という、スパイ大作戦を毎日司法記者は実行した。大物政治家名の極秘調書は東京地検特捜部の奥深い金庫にある。私は発覚したときにそなえて辞表を書いた。

東京地検特捜部は旧庁舎5階にあり夜から未明にかけては検事がいたが早朝には、一階通用口の警備員詰め所を突破すれば、特捜部は無人になる。警備員は新聞を読み、意外に死角を発見した。奇襲は早朝。

4人がチームを組み特捜部のドアを開けるとまたドア。二重廊下になっており、各検事の取調室は鍵がかけてあった。だが、至宝の調書の手に入成功する。検事室は嚴重だが、検事室前に置いてあるゴミ箱には、

2006年9月10日(日) 7月27日(日) 1頁

「ピーナツ」時効に2週間

検察、重大決意へ



高官逮捕は目前
五億円の流れ突きとめる

田中前首相逮捕の日の毎日朝刊一面トップ (76. 7. 27) 一名前を出すべきか否か悩みに悩んだ

参院も兇
小佐野氏再喚問

初夏の夜、最高検検事・伊藤栄樹(のち検事総長)が、裁判所構内を酒のホロ酔い機嫌で歩いていた。彼は

調査の書き損じた紙が多量に捨てられていた。得難い極秘情報的一端だ。スパイ大作戦は強力だが、長く続けられなかった。
大作戦では運び出した調査をストリートに使用してはならない鉄則があるが、私の仲間がミスをした。「捜査部は毎日を狙ってくるだろう」と、私たちは警戒。「作戦は他にもあるからドンマイ・ドンマイ」とスパイ大作戦は中止した。

私には口事件の10年前、検察担当の司法記者になった時、石谷龍生キヤップから「逆転の仮説」を徹底的に叩き込まれた経験がある。
「事件はあらゆる可能性を考えなきゃダメ。多くの仮説をつくる。その中で最もありそうもない仮説が現

実になった時、特ダネの威力はすさまじい。逆転の仮説で戦うのだ」
当時、特捜部が恐喝などで逮捕した田中彰治代議士は「議員は絶対にやめない。刑務所から立候補してやる」と息まいた。各紙はそれを報じていた。しかし「逆転の仮説」は生きていた。田中彰治は突如国会議員をやめた。主婦連が刑務所に押しかけると聞いて田中は恐怖にかられた。私の10年前の特ダネだった。
私たちはロッキード事件であらゆる手法を使った。が、最も威力を発揮したのは「逆転の仮説」なのだ。
検察の秘密主義は徹底していた。政界大物のうち田中角栄前首相については、直前の田中金脈事件が東京地検の捜査にもかかわらず不発に終わり、田中権力の巨大さから田中に

少し前、捜査指揮の東京地検次席であり田中金脈不発に批判があった。私は「田中角栄はどうですか」と声をかけた。伊藤は「角栄は絶対許さない」と怒り出した。伊藤はロッキード事件担当ではなかったが検事の気分はよく知っている。
私はとっさに「逆転の仮説」を思った。そうか、狙いは角栄なんだ。検察の角栄恐怖アレルギーは消えていた。私たちは角栄の徹底的な取材に入った。逮捕一カ月前のことだ。
逮捕前日の7月26日、検察幹部は「病気に」なった。捜査主任・吉永祐介でさえ、夜回りの記者たちに「腹が痛い。明日は病院に寄ってから役所に出るよ」と言った。この異変は尋常ではない。これこそ最高の「逆転の仮説」ではないか。
私たちは朝刊一面で「検察重大決意」と書いた。田中角栄前首相と分かるように書いたが、名前は伏せた。毎日の予告通り田中は翌朝に逮捕されたが、私には深い葛藤が残った。
検察は大物政治家を逮捕する時は、必ず事前に任意調べをするのが鉄則だ。昭電事件の芦田均前首相(無罪)。造船事件で与党の佐藤栄作幹事長(指揮権発動)ら多くの人が任意調べを受けたが、角栄にはそれが無い。田中角栄の名を出すべきか伏

せるべきか——私は迷い、結局、検察の伝統に従ったが検察はそれを無視した。「逆転の発想」を使ったのはマスコミではなく特捜検察そのものだった。
私は検察には完敗したと思った。もし仮に毎日が事前に田中角栄の名を出していたら、その勢いで、ロッキード事件発覚の時、ロッキード極秘書類がアメリカ上院多国籍小委に誤送されたミステリーへの取材に突っ込んでいただろう。
それこそがアメリカの石油政策に反旗をひるがえした田中角栄に対する謀略の様相が濃い、時機を失して真相はわからない。ロッキード事件は後悔の多い事件だった。
それにしても戦後日本は「下山事件」「松川事件」「西山事件」「ロッキード事件」と、常にアメリカが加害者、日本が被害者という謀略構図が多いことか。(文中敬称略)



建物の壁は完全に崩れ鉄骨が折れ曲がっていたカナの空爆現場 多数の民間人の犠牲者が出た(7.31)＝読売新聞

7月31日午前7時半、ベイルートから地中海沿岸沿いにレバノン南部へ延びる幹線道。我々以外、車の影はない。イスラエル軍の「48時間停戦」の一報から8時間。前日の空爆で54人が死亡したとされた(後に約30人死亡と判明)南部カナへ向かった。レバノンに来て3日目。戦争取材の経験もない。安全策を考えたが思い浮かばず、心だけがはやる。激しい空爆を受けた幹線道は封鎖され、山側の唯一の迂回道を通る。黒こげの工場や給油所が続くサイダ南郊から、バナナ畑に囲まれたリタニ川が見えてくる。川向こうの道は、この

レバノン・カナ空爆

取材はガソリンの安定確保から

▼柳沢 亨之

(読売新聞社)

日朝のイスラエル軍の砲撃による巨大な陥没でふさがれていた。生死が「時間差」で決まる現実を感じた。

朝11時半、カナ到着。オムツや靴など住民の所持品が散乱する現場で、携帯電話が鳴る。東京のデスクから。通話状態は良好。携帯で吹き込み送稿すると伝える。だが取材を終え、原稿の構成を考えていると、同僚のカメラマン、中村光一記者の困惑した表情が目に入った。写真送信用の衛星電話が通じないという。朝刊早版締め切りまで30分。中村記者はベイルートでも同じ問題を抱えていた。「ハイテクを駆使するイスラエル軍の通信妨害」。真相は不明だが、レバノン人の間ではそう信じられていた。中村記者は結局、1枚あたり15分かけて携帯電話で送信した。「48時間」は瞬く間に終わり、イスラエル軍の陸海空封鎖で、レバノン国内の物資不足は一層深刻化し

た。特に、取材で車が不可欠な我々にとっては、ガソリン不足が打撃だった。首都周辺の給油所の大半が休業。開業中の店に午前3時から並んでも、入手できる保証はない。闇市場では通常の3倍以上の価格で手に入れることもできたが、それも1回限りで、以降の保証はない。個人的なツテを持つという知人の親族に頼み込み、一回当たり数十リットルの「安定供給」の約束を取り付けた。おかげで国連安保理決議に基づく停戦が発効した8月14日、再びレバノン南部で取材することができた。

ヒズボラが実効支配するレバノン南部や首都南郊での取材現場では、ヒズボラという組織の影を感じることも多かった。カナの現場では、被害者の親族というアッバスさん(30)ら男性2人が、各国記者の質問攻めにも嫌な顔一つ見せず、空爆の惨状を語り、「ヒズボラ軍事部門

はいない」と証言した。他の住民は疎開中のため「裏取り」は難しく、結局、アッバスさんらの話に基づき原稿を書いた。現場周辺には、ヒズボラ要員の特徴であるスクーターに乗った若者2人組がうろついていた。戦争中、人影が消えた首都南郊のガード下の一角だけにはヒズボラ関係者数人が待機し、同地区で不定期に行う「メディア・ツアー」の開催情報などを提供した。14日の停戦後にはヒズボラ要員多数が戻り、各国記者らの案内を本格的に始めた。不発弾の危険を覚えてくれるのは助かったが、「情報操作」が全くなかったと証明することはできない。

停戦後も続くイスラエル軍とヒズボラのにらみ合いは、不安定度と複雑さを増す中東全体の一断片に過ぎないのかもしれない。紛争地での取材は天運に頼る面があるにせよ、日ごろから安全への備えを怠らないこと、そして様々な「証言」を冷静に描くための筆力と知識を磨いておくことの大切さを今、感じている。やなぎさわ・みちのぶ 1995年入社 国際部を経て 04年からカイロ支局 写真撮影 中村光一(なかもら・こういち)記者 1994年入社 写真部を経て 05年からロンドン支局

「なぜ再開を急ぐのか」「政治や経済を優先して、消費者を置き去りにしている」

米国産牛肉の輸入再開が正式に決まった翌日の7月28日、厚生労働省と農林水産省が東京と大阪で開いた消費者らへの説明会では、輸入再開に批判が相次いだ。米国産牛肉に対する不安はなかなか拭えそうにないな、と会場の雰囲気から感じられた。輸入業者もそう考えているようだ。8月23日時点で米国産牛肉の輸入はわずか42トンにとどまっている。

4月から内閣府の食品安全委員会の担当となり、この問題をウォッチしている。ちょうど5年前に、国内で初めて牛海綿状脳症（BSE）感染牛が見つかって以来、日本の食品安全行政は大きく変わった。厚生労働省や農水省が規制や指導を担うが、科学的に安全性を検討するリスク評価は3年前に発足した食品安全委員会の仕事だ。

朝日新聞の場合、食の安全の問題は、農水省担当（経済部）、厚生労働省担当（社会部）、食品安全委員会担当（生活部）が中心となり、部の垣根を越えて取材している。米国産牛肉の輸入再開は、日米間の大きな外

交問題でもあり、小泉首相の訪米日程ともからみ、政治部も精力的に動いた。それぞれが取材した内容をメールで送り、節目節目には集まって情報交換し、どういう視点から記事を作り上げていくか議論した。

昨年12月の輸入再開までは、安全性の議論をリードしてきた食品安全委員会が取材の大きな舞台だった。だが、今回の背骨混入は米国に輸出条件を守らせる立場の農水省、厚生労働省の問題。生活部の記者である私は主に、消費者（団体）や専門家に話を聞き、今回の問題をどう考えているのかを取材した。

悩ましかったのは、安全性についてどう読者に伝えるか、だ。周囲からも「米国産牛肉は本当に安全なのか」とよく聞かれた。今回混入した背骨だけをとらえれば、生後4カ月半未満の子牛でBSE原因物質はほ

とんど蓄積しないので、危険性は極めて低い。

だが、香港や台湾でも骨の混入が相次ぎ、日本の国民の多くは「米国産牛肉は危険だ」ととらえた。「米国に全頭検査を求めるべきだ」といった強硬な意見も出てきた。消費者の考えをありのまま伝えることは重要だが、度が過ぎると、将来的には逆効果になるのではないか、そんな思いが頭をもたげた。

BSEに限らず、特に日本の消費者は、100%安全という「ゼロリスク」を求める傾向が強い。だが、ゼロリスクはありえないし、限りなくゼロを求めていけば、コストも膨大になる。どの程度なら許容できるのか、国民的な合意を形成するためにはリスクコミュニケーションが、大きな課題だ。そのためにも、私たち食の安全にかかわる記者が正確かつ冷静に情報を発信していくことが必要だ。

日本政府も今回はしっかりと手続きを踏んで対処したと個人的には思う。度重なる日米交渉、米国の食肉処理場の再点検や事前調査に加え、再開決定後も含めると全国で計30回も国民向けの意見交換会（説明会）を開いた。

「ガス抜き」の感があることも否めないが、こういった取り組み一つ一つの積み重ねが国民の理解を得るのに欠かせない。

ようやくスタートラインに立った。むしろ、大事なものはこれからだ。厚生労働省と農水省は、米国が実施する食肉処理施設の抜き打ち査察に立ち会うなどし、安全性確保に今後も努めていくという。国民が求める外食や加工品での原産地表示はどうなるのか。その中身を冷静に検証して、伝えていきたい。

繰り返しになるが、人のすることには「絶対」は存在しない。米国産牛肉で特定危険部位の混入が再び起きたとき、今度はどう報じるべきなのか。考えると、頭が痛い。

さくらい・りんたろう 1996年入社
前橋 福井 米子 阪神支局 科学医療部を経て 06年から生活部

100%の安全はないのだが…

食の安全・米国産牛肉

▼ 桜井林太郎
(朝日新聞社)

一豊・千代ゆかりの地

歴史の舞台に 30億円の経済効果



▶小池 豊徳
(中日新聞社)

「近江を制する者は天下を制す」ともいわれ、日本の歴史の転機に数々の舞台となった湖国・滋賀県。戦国時代、織田信長は姉川の合戦で勝利し、安土に城を築いた。信長の家臣だった豊臣秀吉は、長浜の地で初めて城持ち大名となった。長浜城は今も「出世城」と呼ばれる。

秀吉の家臣の山内一豊もまた、湖国の歴史に名前を刻む戦国武将の一人だろう。派手さはなく、きまじめな男。あるいは一豊よりも、夫を支えた妻千代のほうが後世に名を残しているかもしれない。

琵琶湖の東北部に位置する湖北地



平日でも多くの観光客でにぎわう長浜市中心部の黒壁スクエア

方は、一豊と千代にまつわるエピソードが盛りだくさん。千代の生まれた米原市、一豊が長浜城主になる直前、虎姫町に初の領地を与えられた。名馬を買った黄金十両の言い伝えは、木之本牛馬市（木之本町）とも言われる。

大河ドラマ「功名が辻」の放映が始まって9カ月。ドラマの舞台は長浜から掛川へと移ったが、長浜市の町中は観光客であふれている。平日にも大きなバスが次々と訪れ、週末は市街地の駐車場に入る車で幹線道路は身動きできない状態。まさにド

ラム効果。だ。

長浜市では、ドラマに便乗して「一豊・千代博覧会」を開催している。長浜城歴史博物館、長浜別院大通寺、曳山（ひきやま）博物館の3カ所で、一豊と千代のみならず、秀吉や信長に関する資料、長浜曳山祭など地域文化を紹介している。

また、食や文化、歴史など湖北の情報を発信するミニFM局を開局。一豊と千代が仲むつまじかったという言い伝えにあやかっつて、カップルでクイズを解いたり二人三脚で百メートルを競争するといったユニークなイベントも開催した。

長浜市は今年の入り込み客数を569万人と予想する。これで試算すると、年間の観光消費額は192億円で、前年比約30億円の増。これを「大河ドラマによる経済効果」と見て、大河ドラマによる経済効果」と見て投資は、莫大（ばくだい）な効果として地元で還元されることになる。

こうした数字をはじく背景には、10年前の大河ドラマ「秀吉」で展開した観光キャンペーンの成功がある。「柳の下」の2匹目のドジョウを狙った」と担当者。今回は、一豊、千代ゆかりの地を巡るドラマツアー

など、エリアを湖北一円に広げて地域への効果を期待する。

また、18年前から地域をあげて取り組むガラス文化の情報拠点「黒壁」を核とする町づくりも、長浜の魅力の一つ。普段でも年間約200万人が訪れる県内最大の観光地に成長しており、こうした集客力の高さに加え、大河ドラマの舞台となったことで相乗効果を上げた。

さらに、秋に向けて秀吉をテーマにした「長浜出世まつり」や、若い女性が着物姿で古い町並みをそぞろ歩きする「きもの大園遊会」などの観光イベントがめじろ押し。これまでに以上の誘客を期待する一方で、このブームをどう生かすかが課題だ。

こいけ・とよのり 1997年入社 岐阜支社報道部を経て 2003年10月から長浜通信局長

一口メモ 長浜市

人口 84,433人 (平成18年7月末)
世帯数 29,254世帯 (同)
面積 149.57平方キロメートル

滋賀県北東部に位置し、西に琵琶湖が広がり、東に伊吹山脈が連なり、北に長浜市、南に浅井町、南東に新市、南西に竹生町、南東に八景の観光スポットが点在する。主要産業は製造業。

湖平町臣琵琶な盛
なる。わ豊琵琶ア京、中流も
び。浅井町、たこ黒壁スクエ近畿、経済交
が連なり、浅井町、たこ黒壁スクエ近畿、経済交

東京オリンピックのころの話です。もう40年余りも昔のことになります。私の記憶もセピア色に霞みがちで怪しいのですが、たしか私は東京の街なかで、この先輩のマイカーに乗せてもらった思い出があります。

先輩とは、夏の盛りにパリで客死した中日新聞社（東京新聞）欧州駐在客員の熊田亨、別名「藤村信」氏のことです。モーターゼーション揺籃期だった時期に、かなり先を行っていたのネ、と一般の方なら軽い驚きを感じるでしょう。故人をよく知る人ならば、エツと耳を疑うかもしれません。

それほどまでに、熊田さんは「昭和30年代のマイカー」のイメージとは裏腹の「スローライフ人生」の中を生き続けたジャーナリストでした。一刻一秒争う新聞記者の世界に身を置きながら、この大人の周囲では、いつも時間がつくり流れていたのです。

このパソコン全盛時代に、パリからの送稿は最後まで、古い用紙に手書き原稿のファクス送信方式でした。支局の若い記者には、通信社のティッカーに頼り過ぎるな、現地の

「歴史に恋した」ジャーナリスト 故・熊田 亨さんのこと

新聞や本をじっくり読め、が口癖でした。そして、パリ拠点の「ヨーロッパ展望台」からの世界観望に満足せず、晩年になっても手間ひまかけて、アメリカや中国まで現場視察の足を伸ばしました。

その昔の新聞の国際記事はとかく生硬で、学者の論文の水薄めスタイルが眼に付きがちでした。その中で熊田原稿は、喧噪の国際政治の表層を突き抜けたところに横たわる「歴史の深海」と「人間の物語」を汲み上げて、光を増したのです。

6年前の日本記者クラブ賞受賞の際の座談でも、史学専攻がジャーナリスト志望に転じた訳を尋ねられて「記者になったら、これが面白い。追いかける日々の出来事が歴史的背景と切り離せないんですね」と。そこにも、目先の刹那の事象を超えた「悠久の時間」への、彼の愛着がこぼれ出ていました。

「歴史に恋した、根っからの国際ジャーナリスト」——そんな先輩を身近に持てたことを私は誇りに思っています。

中日新聞社相談役

吉村 信亮

大阪市生野区周辺はかつて「猪飼野」と呼ばれ、朝鮮半島から多くの人々がこの町にやって来た。いまも約3万人の在日朝鮮・韓国人が住む。狭い道にマーケット、朝鮮料理屋、零細家内工業、住宅がぎっしり並ぶ。大阪の下町の雰囲気も漂い、多くのものが混ざり合う「ビビンパ（混ぜ飯）」のような町だ。

ドキュメンタリー映画「ディア・ピョンヤン」の監督、梁英姫（41）さんは3人の兄とともにこの町で育った。済州島から来た父は朝鮮総連の幹部として活動。30数年前、父は3人の息子を「祖国」の北朝鮮に送った。「祖国に忠誠を尽くせ」が口



試写会

©Yonghi Yang / Cheon.inc

ぐせ。梁さんも北朝鮮を「祖国」と教えられ、幾度となく平壤を訪問し、兄たちの家族と交流してきた。

梁さんは、こうした家族の姿を10年にわたり撮り続けてきた。カメラで父と真正面から向き合ううちに「なぜ兄たちを送ったのか」「生活のすべてをなぜ『祖国』に捧げなければならぬのか」という疑問が。それを父にぶつける。やがて父も「息子たちを北朝鮮に」行かさなくともよかった」と漏らすようになる。

映画は父を中心にした家族の絆を描きながら在日1世と2世との祖国観の違い、孤立を深める「祖国」に対する失望感をにじませる。梁さんの「この国とあの国はこの海によってつながっているのか、隔たれているのか」というナレーションの言葉に、進展しない日朝関係に対する「在日」の思いが集約されている。重いテーマの映画だが、撮影が難しい万景峰号の船内の様子や平壤の市民生活もさりげなく収められ興味深かった。

毎日新聞紙面研究本部長

薄木 秀夫

ディア・ピョンヤン…日朝関係への「在日」の思い

マイBOOK マイPR

■マリー・ルイーゼ——ナポレオンの皇妃からパルマ公国女王へ

塚本 哲也 (毎日新聞出身)

脳出血に襲われ、右半身右手が麻痺、何とか左手でと、パソコンをいじっているうちに本になった。国を救うためにナポレオンの二番目の皇妃に売られたウィーンの皇女の話である。この時代は、戦争が20年も続き、皇女はじめ人々は苦勞する。やっと平和がきてほっとしたもの、平和を維持するには問題も多く、やがて平和の功勞者メッテルニヒ宰相は失脚し、激動が始まる。昭和平成の戦争と平和を思いながら、平和の舵取りは危機と紙一重というのが教訓。(文藝春秋 2600円)

■企業スキャンダルと監査法人 なぜ不祥事は続発するのか

早房 長治 (朝日新聞出身)

今日、大企業のトップは「コーポレートガバナンス(企業統治)こそ企業の命です」「内部統制システムづくりに全力を注ぎます」といった言葉を常に口にする。ところが、大企業のスキャンダルが続発している。昨年从今年にかけて、東京地検などが摘発した官製談合事件では、三菱重、新日鉄、石播などの日本の代表的企業までもが登場した。不祥事続発の原因はモラル低下、ルールなき規制緩和に加えて、マスコミの無力化がある。

(彩流社 1890円)

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■湾岸ネット番組収録 和歌山放送・ラジオ大阪・ラジオ関西

昨年9月、大阪湾沿岸のラジオ3局が緊急時の相互援助協定を結んだ。阪神淡路大震災から11年目の今年1月17日には共同で特別番組を放送。その第二弾として、和歌山出身の二階産産相と大阪出身の北側国交相が対談。兵庫出身の作家玉岡かおるさんの司会で防災、物流、観光などをテーマに関西の取り組むべき課題について語り合った。1時間の収録番組は3局で8月中旬に放送された。今後も「湾岸ネット」として随時、番組を制作していく予定だという。(8.7 宴会場)

照会先：ラジオ関西編成局 Tel：078-362-7373

■サマーワ孤児院完成記者会見

陸上自衛隊が約2年半にわたって人道復興支援活動をしたイラク・サマーワに7月孤児院が完成、現地の奉仕団体に引き渡された。埼玉県のライオンズクラブ国際委員会を中心に街頭募金などで建設費を集めた。同クラブ会員でもあり建設基金事務局長を務めた中東調査会の大野元裕上席研究員が建設の経緯や概要を説明した。イラクで死亡したジャーナリスト橋田信介さんの橋田メモリアル・モハマドくん基金からも資金提供があり、妻幸子さんも会見に同席した。(8.9 宴会場)

新しいOB会員

■2006年度J C J大賞贈賞式

日本ジャーナリスト会議(J C J)が優れたジャーナリズム活動に贈るJ C J大賞は、共謀罪に関するキャンペーンを展開した東京新聞特別報道部の「こちら特報部」に贈られた。法案の問題点についていち早く反応したことなどが評価された。このほか北海道新聞の往住嘉文記者(沖縄返還密約・元外務省高官証言スクープ)、テレビ朝日・朝日放送「サンデープロジェクト」取材班(シリーズ「言論は大丈夫か」)などにJ C J賞が贈られた。(8.12 10階ホール)

■第29回アセアン記者研修参加者歓迎レセプション

新聞協会の招きでアセアン7カ国から14人の記者が8月26日来日、歓迎パーティーが行われた。インドネシア、シンガポール、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア、ラオスの中堅・若手記者は9月23日まで滞在。国会や日銀、日産などの企業を見学、取材するほか富山、石川、福岡各県を訪問する。(8.28 宴会場)

照会先：日本新聞協会国際部 Tel：03-3591-3462

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉
電
カクテル

9月：いたずらジョージ

9番目の干支、申をイメージしました。ダークラム、バナナリキュール、パイナップルジュースなどをシェイクしたフルーティーなカクテルです。お試しください。

和
食

松茸懐石コース (10月6日まで)

秋の味覚の代表である松茸を味わっていたたくコースを用意しました。グラス冷酒がついて5,250円です。(板長：藁科浩)

先付：蟹西京漬け 土瓶蒸し：松茸、鰻、海老、銀杏
生物：刺身三点盛り 焼物：宝楽焼(松茸、鴨、帆立他)
煮物：秋野菜吹き寄せ煮 揚物：真丈松茸見立て 食事：
松茸ご飯 甘味：抹茶アイスクリーム

洋
食

初秋特別コース (10月6日まで)

まだまだ残暑が厳しい日もありますが、秋を先取りしたメニューをお楽しみください。

(シェフ：黒須修一)

前菜：ホタテ貝とキノコのソテー スープ：松茸入りコンソメスープ メーン：牛フィレ肉の焼きしゃぶ仕立て
デザート：シャーベット

これにパンとコーヒーがついて2,890円です。ランチタイムにもおためしいただけます。

寄贈書

『インドネシア人外交官の目から見た日本』(アブドゥル・イルサン前駐日インドネシア大使著)リチャード・スシロ会員

招待券 (ご寄贈いただきました)

▶読売新聞社『仏像展』『ベルギー王立美術館展』▶日本経済新聞社『風神雷神図屏風展』

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 807人
個人会員 1,653人 法人・個人賛助会員 77社 189人
特別賛助会員 75人 名誉・功労会員 10人
計 223社 2,734人

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長 = 住田良能

委員 = 池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也
高橋利行 西田善夫 松本侑壬子

連絡 = 長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」：8月の新規掲載

●シン駐日インド大使「日印関係を考える」[A few thoughts on India/Japan relations] (英文) (2006. 8. 22) ●ダウナー・オーストラリア外相「日豪：グローバル・パートナーシップ」[Australia-Japan: A Global Partnership] (英文) (2006. 8. 1) ●額賀福志郎防衛庁長官 (2006. 7. 21) ●町田顕最高裁長官「裁判員制度について」(2006. 6. 23)

クラブHPを“散策”してみてください

クラブのホームページ内をぜひ散策してみてください。ジャーナリストのクラブならではの“お宝”を発見していただけるのではないのでしょうか。

サイト内は5つのセクションに分かれています。

「概略」では創立からのクラブの歴史や活動・組織などを説明しているほか、「日本記者クラブ賞」「これまでの特記すべき会見」なども載っています。

「資料室」は注目セクションです。特に、過去の歴史的な会見や重要ゲストの会見内容を全文収録した「会見速記録」は、記事執筆の際の資料として利用していただけだと思います。現在、83本収録されていますが、今後、上記のように直近の記録のほか、古い会報に掲載されていた会見記録も収録し、アーカイブとして充実させていく予定です。クラブ会報既載の「クラブゲスト」も「会見レポート」として、このセクションに掲載しています。なお、創立以来の会見総年表もここに掲載されています。

「談話室」には、クラブHPだけに特別に寄稿していただいた「会員エッセー」コーナーがあります。「旅の記憶」のタイトルで、会員の「旅」にまつわるエッセーが収録されています。会報既載の「ワーキングプレス」「地方発」「書いた話・書かなかった話」「試写会」「情報発信」もここに転載しています。

「English」セクションには、英文のクラブ紹介だけでなく、創立以来の主要外国人ゲストが国別にリストアップされています。

「事務局から」にはレストランの最新のお勧めメニューや会員社の展示会の案内も載っています。



クラブHPへのご意見やご感想も下記宛てにお寄せください。<メールアドレス hasegawa@jnpc.or.jp>

<訃報>

鈴木松夫会員 (朝日出身、90歳) が7月26日急性肺炎のため、大田信男会員 (朝日出身、86歳) が8月5日に死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定 (9/4現在)

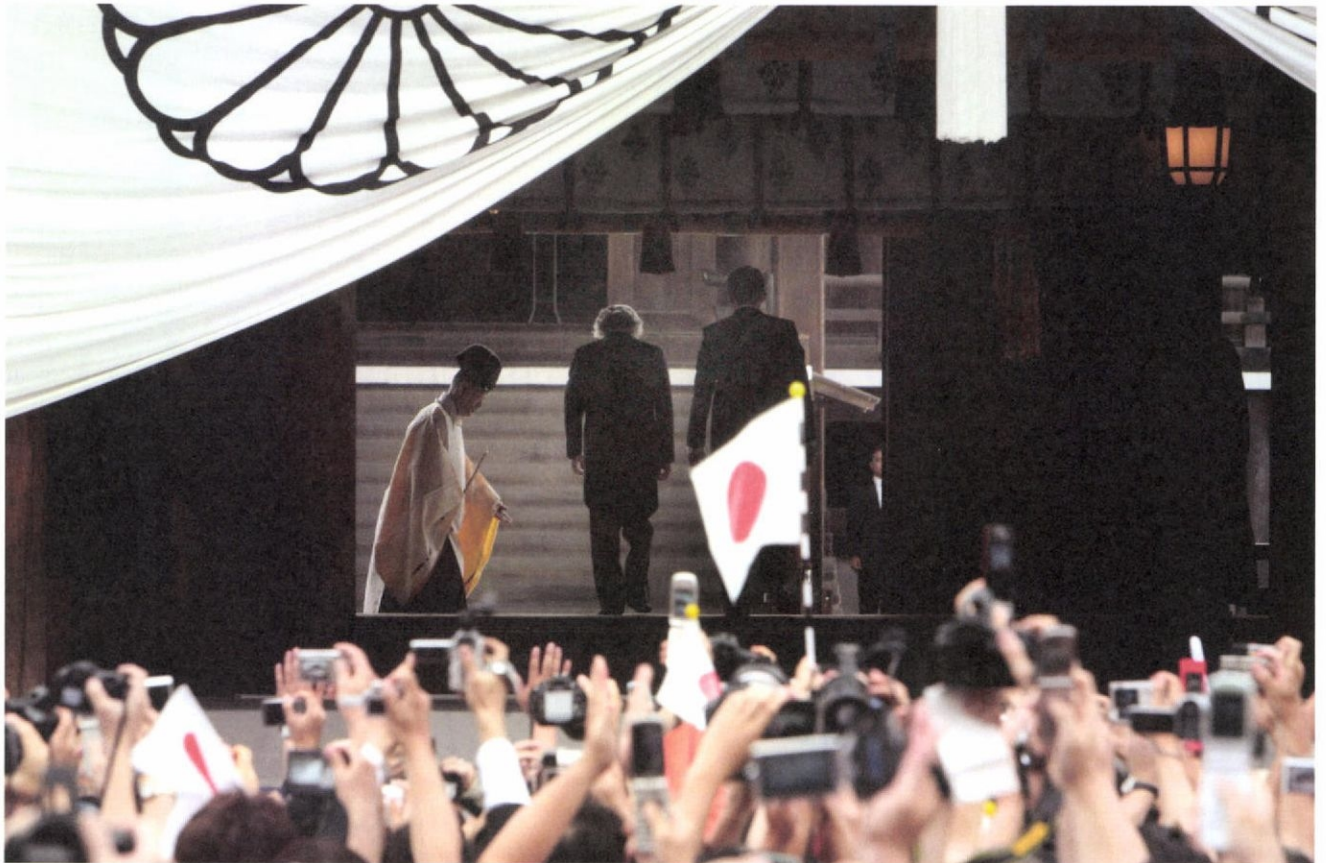
9. 13 (水) 15:00~16:30 (10階ホール)
福島瑞穂社民党党首記者会見
9. 15 (金) 15:00~16:30 (10階ホール)
志位和夫共産党委員長記者会見
9. 16 (土) 試写会「ワールド・トレード・センター」
①11:00~13:10 (10階ホール)
②14:00~16:10

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 河口 貞史 (東京新聞編集部)
写真 眞部



たくさんのデジカメは小泉首相の背中に何をみたのだろう

公約・膏藥

「いかなる批判があろうとも、八月十五日には必ず靖国神社に参拝する」

これは二〇〇一年春、自民党総裁選挙に臨んでの公約でした。あれから五年。今、本殿への階段を上るあなたの胸は達成感に満ちあふれていることでしょう。

選挙公約というのは、当選した後に実行する政治行動を事前に明示するものです。個人的行動ではありません。「当選したら結婚します」などは公約となりえません。自民党総裁(即首相)の政治行動としての参拝を公約したはずですよ。

それにしては歯切れが悪いですね。「内閣総理大臣たる小泉純一郎の参拝」とか「総理大臣の職務としての参拝ではない」とか。また、あなたはここところ参拝を「心の問題」だとして、「他人(国)は干渉するな」と言うのを常としていました。しかし、胸のうちで何を念ずるかが心の問題であって、モーニングに身を固め、多くのカメラを意識して神社に出かけるのは行動、デモンストレーションです。心の問題ではありません。

ある経済団体が「参拝しないよう」提言した時、あなたは「政治と商売は別」と、みずから参拝が「政治」であることを認めたではありませんか。

残念ながらあなたの背中には「ご都合主義」という「膏藥」しか見えませんよ!

(田畑光永)